

成形圖說

五穀部

十五

農商部
書圖
第 六 號
共 冊

本館行政文庫
和書門
八三〇二
三〇冊架函號類

內閣文庫
和書
八三〇二
三〇冊架函號類

內閣文庫	
番號	和 8342
冊數	30 (15)
函號	196 98



成形圖說卷之十五

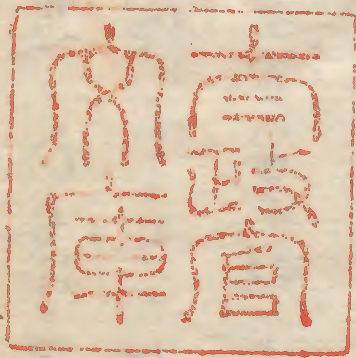
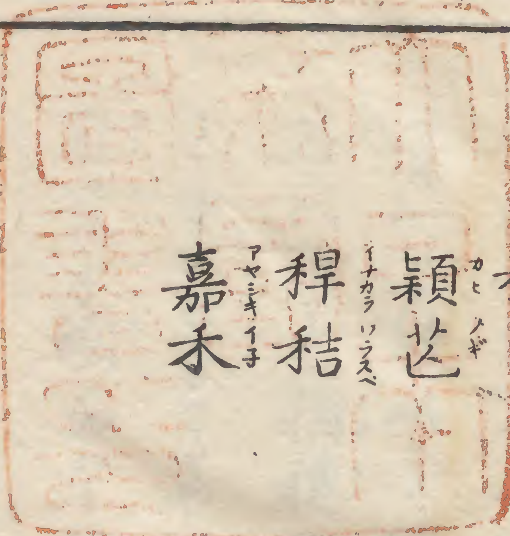
目錄

稻イネ 附穗イネノエ 相イネノカ

穎カヒノ 芒ノ

稈イネノカサ 結イネノムス

嘉禾アヤシキイネ



明治十二年購求

成形圖說卷之十五

成形圖說卷之十五

五穀部類

凡穀の類甚夥一而して天下稻穀とてとく人民と育ふる
 第一と次此のものは皇國乃孺子負給いく天皇此御
 名にいと福穂の事と称奉るは斯瑞穂國と統御ふは
 く申すもとて也古事記傳曰神津代乃御名に豊香節豊
 買葉木國あり皆福よよまは御名なる下香節ハ稻の
 靡き垂るは意豊買ハ豊穎とて葉木國はハビ出りこ
 もりうなは意雲野ふととらめ之美竹乃之美とて福乃
 ふさやうよふとらら乃意か又嚴稻稻飯御食王など

の御名乃例と云はるけふハハ不理とありぬ一
謹按ラオモ 懿德乃御諱とイミナ 報友とスキトモ 孝照の御諱と香
殖稻エシ子とセ 蓋亦 天忍穂耳 天津彦穗とアミノオシホミ 天津彦穗とアマツヒコホ 其
相いとス瑞徳国と統御より稲穂乃縁ふと取
まむい天の下乃君も立むは生民乃為なれハ之と食
ふの物と御名のうへにまえさせむ減ふいみくお
ゆちなりかくとふやう穀ふいふはいふくは稲種
五品ふとええい色を稲と主といるる也是は麥豆粟
稗ヒエ加へて五穀と古事記は稲粟小豆麥大豆と
延喜式は五穀訓て田成物といへり九穀乃名ハ皇極

紀に見えしころを始がふと洛くしては五穀乃名古今
互に異同あり禮月令は黍稷麻麥豆と五穀やして稲と
とてハ其地の情とてさう周書云神農之時天雨
粟是則初有五穀之始也宋應星の天工開物は五穀ハ麻
菽麥稷黍獨遺稻者以著書聖賢起自西北也と辨せハ
此類ハ少なきと我 邦ありてハ西北とて稲生さる
地とわしとろハ其初水田少くゆ急あり禹本紀は
今益予衆庶稻可種卑濕昆陽漫録曰西土乃いふハ
一うは後世は田大に辨とてえ來岡穂の種なりゆ
系や今ハ稻宜くは頃異国の來とみるは岡穂な
り我 邦上古よりあり田とて米の宜くき萬國は
勝るおやをさるまハ我 邦と水穂國とを稱する

今姑く諸書と鈔録して参閱し便りて鄭玄月令
 註に五穀ハ黍稷稻麥菽周禮注作黍稷麥稻穀梁傳に禾麻粟麥
 豆素問真言論に麥黍稷稻豆趙註孟子朱熹藏氣法時論
 に麻麥稷黍豆五常政大論に麻稷麥稻豆王逸離騷註靈
 樞五味篇に麻麥稷米黃黍大豆周書に凡禾麥居東方黍
 居南方稻居中央粟居西方菽居北方太平御覽范子計然
 と引て五穀者東方多麥西方多麻北方多菽中央多禾以
 上の書と所小異大同蓋必と根據ありては〜
 東方は麥多り如〜其方位に泥て其實去り多にあ〜
 次夏官職方氏云正東曰青州其穀宜稻麥今和蘭人我東

方の稲米と天下第一〜の産物と交易とるりの絶
 蓋麥ハ北方乃地に生次歐羅巴地方麥といて常食と
 以又三穀四種六穀七穀八穀九穀乃名負あり格物論云
 稲菽是也四種者黍稷稻麥五穀者麻黍稷麥菽六穀者黍
 稷粱麥菽稌是なり今按に三穀六穀ハ是周禮とあり
 而三穀四種に稻ありて五穀六穀に稻と黍と稷と粱と
 菽と亦失也七穀者通雅に黍稷稻粱二麥菽又
 八穀者星經に黍稷稻粱麻菽麥烏麻九穀者周禮に黍稷
 秫稻麻大小豆小麥一説に九穀無秫大麻而有粱菽酉
 陽雜俎にハ黍稷稻粱三豆二麥とん〜
 然〜恐〜ハ皆後人の況み出〜
 羅存齋の爾雅翼云古人説百穀以為粱者黍稷之總名稻者漑種之總
 名菽者衆豆之總名三穀各二十種為六十蔬菜之屬助穀
 各二十種凡為百穀然予以為穀之種類每物不下十數亦

今と考ふるに源と成るは古きあひよるははいつお
と而悠紀より齋忌して主基と濯とぬひに並は新見川
ふて御襖被ふらひ官司と川上は臨と潔齋し致齋散齋
の儀式あるとていつかて大嘗會は中々京よ
ハ信尼のほ来も禁られ梵刹の鐘鼓と響ひとと止ら
依延喜大嘗式曰令所司卜定悠紀主基國郡又卜定田及
齋場雜色人等凡出御前行の猿女御巫中臣齋部佐伯伴
造大臣公卿各其職掌あり夫木集大嘗會と詠傳りて
夫が代は安乃郡の貢もの齋場の稻穂搗と初々せむ
しは稻穂の國郡教所の中より卜定らひきりて中

頃より悠紀ハ近江國主基ハ丹波備中の兩國あがは用
らば當夜成り刻天子廻立殿に御しよふ是君も立かふ
ハ萬蒼生の為とて新稻既も熟して之は神祇も祭り
せむとて年穀の恩徳と報ひ億兆乃授育と施しあふと
く和氣拾遺集 伏見天皇の大御歌神やしれその為と
てを心とておとふ所の為なりて世とハ新とてされハ
年中の祭祀も孟春止月初年祭とて第一とてやとて御
即位の後幣帛成諸神に奉らば祝詞とて食國天下之政
依所聞食とてわら食國とて心とて者なりとて
稻穂古事記○永仁大嘗會中納言俊光とくらきの千五
百乃秋のちりめりけ田中此稻のわさ穂とてつむ

荒稻アラニナ 延喜祝詞式

穗ホ 音遂古文作遂說文禾成秀也詩傳穗秀也

禾ホ 廣雅梁穗其穗謂之禾

蕃名

書紀ホ 穗の一字と伊奈保と訓れり續紀ホ 赤丹穗と

つとと熟稻とつとつめはいつとつと川めふがたと晴稲と

アホ 芳葉ホ 丹穗ホ とつとつめはいつとつと川めふがたと晴稲と

書紀註ホ 穗訓保火之謂也草木砂石自含火也又曰草木

の萌出穗ホ 出初る花の答ホ の紅が糸是皆火精の著ホ

と見るホ 又曰萌與燃同訓義花將開俗謂火登毛須按

川ホ くれハ秀亦保とつとつめはいつとつと川めふがたと晴稲と

保ホ とつとつめはいつとつと川めふがたと晴稲と

大神勅曰以吾高天原所御齋庭之穗亦當御於吾兒ホ 其

穗ホ 八即稻穗ホ として人民生育の大奉と揚て皇天受授の詔

勅ホ と日嗣の皇孫ホ 子誥ホ むふ謹て其御奉意ホ とつとつめはいつとつと川めふがたと晴稲と

夫五ホ の穀ホ 豊ホ ありとさハ衣ホ とたらといぬ魚ホ し含ホ とつとつめはいつとつと川めふがたと晴稲と

一ホ さものか衣ホ と為ホ らる例ホ ありとらありホ とも多紀の

實ホ ハ衣食ホ といつとつとつめはいつとつと川めふがたと晴稲と

春天子乃以元日祈穀於上帝孟秋農乃登穀天子嘗新ホ

薦寢廟大戴禮嘗新於皇祖皇考ホ 左傳云夫郊祀后稷以祈

耕ホ 又曲禮云歲凶年穀不登君膳不祭肺馬不食穀馳道

不除祭事不縣大夫不食梁士飲酒不樂云々ホ 王制云五穀

市穀梁傳云一穀不升曰歉二穀不升曰饑三穀不升曰饑
 四穀不升曰荒五穀不升曰大侵大侵則君食不兼味臺榭
 不塗廷道不除百官布而不制鬼有年かちとに穀物ハ有年に
 神禱而不祠五穀皆熟為有年
 きまのよしてと申して 皇國の福むと申すやけあ
 我人ハ有年より押来て嘗のころあふふのけくが
 はよとあれ吾 邦よて稲と五穀乃長土りてりの
 恭稷城れく次ハの稲種地をて神と祭りて先もも
 薦スミるあれハ是もさきてめてれささるるあふし武蔵風
 磨郡大止麻智乃天神圭田六十束六毛田所祭大己貴神
 也 安閑天皇乙卯年始奠宮社花祭之新稲之時
 以新稲祭之とあり是も天皇の大廟ふ
 らてと稲とて常るの式あるなり
 書紀ハ新稲と初穂と訓やり初穂とハ新稲と神も享る

先ハ薦スミるもつる是も人々厚のゆゑと報奉のれも出
 多り延喜祈年祭祝詞ハ荷前者皇太神能大前ノサキハ爾如横山
 打積置ツキ氏残ハ乎平聞者美葉ツキ東人の荷はふのともこの荷
 緒ツと依り荷向ノサキハ籬ハ坂東の国より初穂のともぎ物と
 籬ツよいよ鳥よおふて上とつる 荷前と初穂とつるハ
 今の高貴の荷口の言
 今ハ神宮ハ其式ありとつる山城風土記久世郡穂掛
 神社二座とあり駿河風土記ハ早稲熟時以穂並キ拔祭
 之のよええし西州の俗ハ稲の初穂と以霧島宮も献る

と毎歳の例式と以蓋 皇孫福穂と撒^{ミキ}ふの故実と存
たり万葉と吾妹^{ワヤモト}子^コうわごとくつくも秋の田乃初穂乃
かつ^ツ尺れとけりぬらも年中新奉款合と新奉あやま
のあ乃初穂乃おきとけり神酒^{ミサ}乃雪の上人三代實録
新鑄の錢早穂^{ハヤホ}二十文宣胤記と永正十六年正月十一日
下御靈^{ノカシヒキ}巫女^ニ供米持來遣初穂物^ヲ下學集と最華取^{ハツホ}一切草
木最初之花献神^ヲ故云言塵集と早米^{ハヤホ}とんえり今俗早
米とのこ呼つる古言様と稲の外物とこはつ母と
おハ轉なるをとんえり^{ハツホ}魚ハ初尾^{ハツホ}と書り凡
食物の類より錢^{ハツホ}貨^{ハツホ}幣^{ハツホ}花^{ハツホ}とあり新^{ハツホ}なり賜物^{ハツホ}或ハ始^{ハツホ}り得^{ハツホ}

物ハ祖先^{マシ}よ^{マシ}家^{マシ}の套^{マシ}語^{マシ}とあり和漢共よいふハ
食^{イヒ}とる^{イヒ}時^{イヒ}め^{イヒ}か^{イヒ}る^{イヒ}飯^{イヒ}粒^{イヒ}と祭^{イヒ}ま^{イヒ}る^{イヒ}
子^{イヒ}小^{イヒ}き^{イヒ}垣^{イヒ}と^{イヒ}居^{イヒ}り^{イヒ}と^{イヒ}ハ^{イヒ}浮^{イヒ}屠^{イヒ}の^{イヒ}俗^{イヒ}と
存^{イヒ}や^{イヒ}り^{イヒ}ハ^{イヒ}い^{イヒ}り^{イヒ}と^{イヒ}と^{イヒ}佛^{イヒ}語^{イヒ}の^{イヒ}俗^{イヒ}と
え^{イヒ}り^{イヒ}又^{イヒ}按^{イヒ}と^{イヒ}武^{イヒ}烈^{イヒ}紀^{イヒ}と^{イヒ}影^{イヒ}媛^{イヒ}の^{イヒ}戦^{イヒ}と^{イヒ}悼^{イヒ}て^{イヒ}
吊^{イヒ}ひ^{イヒ}る^{イヒ}り^{イヒ}の^{イヒ}歌^{イヒ}此^{イヒ}玉^{イヒ}筥^{イヒ}あ^{イヒ}は^{イヒ}飯^{イヒ}と^{イヒ}威^{イヒ}玉^{イヒ}盤^{イヒ}あ^{イヒ}は^{イヒ}
一^{イヒ}蓋^{イヒ}注^{イヒ}を^{イヒ}ば^{イヒ}ち^{イヒ}ゆ^{イヒ}く^{イヒ}と^{イヒ}あり^{イヒ}是^{イヒ}今^{イヒ}あ^{イヒ}と^{イヒ}喪^{イヒ}礼^{イヒ}の^{イヒ}時^{イヒ}靈^{イヒ}前^{イヒ}と^{イヒ}飯^{イヒ}
と^{イヒ}奠^{イヒ}り^{イヒ}水^{イヒ}と^{イヒ}佛^{イヒ}語^{イヒ}の^{イヒ}縁^{イヒ}あ^{イヒ}と^{イヒ}あ^{イヒ}と^{イヒ}は^{イヒ}水^{イヒ}初^{イヒ}穂^{イヒ}と^{イヒ}
ハ^{イヒ}皆^{イヒ}太^{イヒ}古^{イヒ}乃^{イヒ}風^{イヒ}儀^{イヒ}なり^{イヒ}志^{イヒ}と^{イヒ}新^{イヒ}奉^{イヒ}の^{イヒ}礼^{イヒ}と^{イヒ}浮^{イヒ}屠^{イヒ}の^{イヒ}あ^{イヒ}
妻^{イヒ}め^{イヒ}り^{イヒ}り^{イヒ}と^{イヒ}佛^{イヒ}語^{イヒ}の^{イヒ}酒^{イヒ}水^{イヒ}と^{イヒ}佛^{イヒ}語^{イヒ}の^{イヒ}火^{イヒ}と^{イヒ}秉^{イヒ}と^{イヒ}茶^{イヒ}毗^{イヒ}と^{イヒ}
ん^{イヒ}え^{イヒ}り^{イヒ}と^{イヒ}い^{イヒ}と^{イヒ}と^{イヒ}神^{イヒ}樂^{イヒ}歌^{イヒ}と^{イヒ}麻^{イヒ}績^{イヒ}女^{イヒ}の^{イヒ}さ^{イヒ}え^{イヒ}ハ^{イヒ}志^{イヒ}と

川き志を彼のの如いふるもつらふハ福と上納せ給討
 けりおほしき稲と女児どものおもひとふらふ難式
 凡百姓被雇刈稻之日不得率入拾穗とも又穂と拾ふ
 ことは其後の物とあり其類と女の得るものとも
 とも毛詩大田に彼有遺秉此有滞穗伊寡婦之利あり又
 田植謡に八穂よ八石穂も穂りさきとハ祝の辞也万
 葉に秋の田乃穂じきのあまらる月ふりそ我ハそのおや
 ふつれあきものとは凡秋作穂なるもの籠く穂なるもの
 の風あて波のよほやうみとけりてハ稲葉のあき
 かりとをなると稲葉を一つは秋深くをの黄めふなり
 葉の細く密くとあるとたるとたると新よ小田の稲葉

の雪と波とをりかりの菴の秋はむさ
 さめ因幡國ハ本稲葉のくよといり
 稻華 富州花 詞花葉あむとて多倉ふよと
 のけりて田さるせれやとよの花

因音因集 韻禾華
 蕃名 ブルームハンレイスト

此の麦花に花に似る文粹橘在列詩に千靡稻花千畝
 遠其香かくは一秋よのふらふり給はよりのあき
 なる稲田あは鮎の子並敷ふああきて稲華の謝と候に
 食て茂者家とのそ續紀十六國言有物如灰從天而雨
 畿内農稔價賤老農名此物為米華明和寅卯の歳を米花
 哉雨やととんえと

首^セ禾^ノ子^ニ禾^ノ穗^ヲ垂^テ而^{シテ}向^テ根^ヲ君子^ノ不^レ忘^ル本^也○稻^ノ穂^ノの^出あ^ぐる
 穎^キ枯^るる^は白^穂穎^と吐^くも^實と^成ぶ^るなり^俗
 穂^ホ枯^カと^呼つ^り又^黒穂^{とは}實^とな^らぬ^は一^して^燒進^スる^が也
 字^書稞^禾傷^雨
 則^生黒^斑也

乃^義和^名鈔^〇
 即^芒也

波^志加

稻^毛

東^鑑二^稻毛^三部^何り^或者^也

芒

音^茫和^名鈔^引切^韻禾^穂芒^也正^字通^稻之^有芒^刺者^曰
 芒^種周^禮地^官下^地澤^草所^生種^之芒^種註^芒種^稻麥^也

利^音眇^說文^禾芒^也又^曰穰^芒
 粟^也六^書故^五穀^皆有^穰

蕃^名ス^テケ^ル

乃^は直^也義^は物^の實^銳なる^を支^とい^はる^一説
 支^ハ利^ノの^謂劍^芒の^類皆^是なり^波志^加と^ハ物^の柔^靱
 堅^腕と^ハ呼^つる^其芒^の物^と刺^とい^きう^為す^ん又
 稲^とと^麥と^り青^竹と^りも^其芒^の刺^も有^る也^一
 い^つり^稲芒^も長^く短^く細^く大^きく^又者^各の^差別^{あり}
 毛^色を^赤白^の外^に數^種あり^一
 と^ソ又^毛見^毛止^なら^ぬも^一
 又^地より^生ず^るもの^とあ^へて^毛と^もい^はる^一
 又^雄進^尊盤^古氏^の如^き身^毛患^く樹^毛なり^とあ^る
 毛^色を^赤白^の外^に數^種あり^一
 穀^梁傳^凡地^之所^生謂^之毛^晏
 氏^春秋^以草^木為^髮藤^相公^辨

成^形圖^說卷^之十^五

十^六

松竹策文野草
山木毛髮之種

稻種古事記○天智紀ハ稻種ト多奈志稱ト田
保ト又種ハ田根ト田ハ稻ハ保ハ即穂あり

蕃名 サート・ハン・レイスト

古事記ハ大食津姫ノ於二目生稻種ト見レ書紀ハ生
稻ノ伊勢尾張美濃近江長門
等ノ物ト美好ト一國ノ中ハ又ハ加
土ハ故米ハ紙備ハ越米ハ糊ハ艶ハ出レ年ト應テ出ツ

くは懐風藻ハ美稻ト美麻志稱ト訓ハ万葉ハ味稻ト作カ

伊勢國ハ大炊ハ一千七ト石糲ハ三十ト

石尾張國ハ大炊ハ一千八十ト石糲ハ二十ト石糲ハ三十ト

尾張美濃ハ江守ハ取ル日神ノ御ハ為シ天

田ハ耕種ハ伊勢之狭長田ト又尾張ノ

言ハ小壑ハ地ノ熱田ハ温潤ノ多田ハ稲ハ一

まノ名ナ風土記ハ佩室ハ終ル義ト志

るハ荊州記ハ淮陽郡ハ西北接萊陽縣ハ有温泉ハ其下流ハ百

里恒資ハ以灌溉ハ常ハ十二月ハ一日種至明年三月ハ新穀ハ便登重ト

種ハ一年ハ三熟ハ温泉下流ノ灌ク所ハ亦熱田ト相類ハ

是煖土なりりぬあり拾遺集物名尾張米とよめ池
とよりこめを種えのおひりぬハおひのくちよる何ま
ふむる飯と聞サヒふきと一きり稲ハハ切ぎとざれとを
そむの土宜ハ相懸クサホして成実よく利益阿ると簡エラミて
ふべきと又土地よよりて福田よ何く粟田豆田よよ
路ミチき取何りかたは取小返く福とてはと不利とい
ふ魚イサ一〇福ハ赤米そお色の何ナニき米の雑マゼするハそ種
子と擇チふおとの種タネ一りりざはゆゑと後撰集いりてか
のちチ一きりととの種とく那何まてるやどに植てては
魚イサく年切とば播ヒキてと苗サダよ出とはかり凡ツ稲種ハ穀と將マシ

と地美好カクキ稲種と擇チと種タネを種とて田よる地生
ふとよ及ヒひは必ヒ稗草赤米と雜マゼり出ぬ仍て田草
と引く時勤てはそり穀コメ採ヒキ去ヘつ一或田ハ穀の種子
とよく乾カし場カは堆カし馬ウマと引くもて二に五に喫クハせ種
子の上と踏フミてて浮ウキ花おけハ虫喰と又種と播ヒキつ前
よ里馬骨と煎ヒキ汁とこく浸ヒキし乾カしれハ蠹ムシと或ハ溜
り魚の油ととめしつ一灰と揉ヒキ分マせ前ハ生長オヒタチ味よく実
のりよ一〇凡ツ種子まきハ四節ともふ午の時おとつし
しま起ヒキき土のそ目よかりとと一〇平城紀曰
稻有早晚各任土宜而盡ツキ穎ホト為穀種子難辨ハ空本者收穎利ホト

稽 説文即 稽心也 菩 字彙 未皮

蕃名ビン子

稲稜の用心弘しむりし屋と葺くもめ之小取まり蕃と
稲穂と二川と折うけく舎とよ依由急奉ハ家居とや
轉しるも曾丹集といちりてとんと流されハ軍中又
ハ標り農耕の切りそめわきと志るなを俗に幕の紋ふ
との入の字類しるるといひりてとつとハ稲と折うけ
解まやいみしき葺き富の室屋と多き葺きがりて葺
ハ檜皮葺なるもとて大神宮式忌廻り寺のこゝに瓦
葺と唱りて 寺と瓦葺といひ さらば尚時ハ葺きの地面と
ふハ韓語なり

廣く葺の禁跡もまうりぬされと白民の居ハ稻稜とて
ぬきしむりに残り稜をまといつり宗廟の尊無二とい

ふ 大神宮だと葺葺葺が依りては葺き常世の

神意と仰る 臣国柱謹按よひり先君慶長の頃の時

々軍國の勲城ハ民とすふ不ふて殊ハ他邦の使者も毎

度あり来りては先君の徳を教ふ葺葺に民なれは

一家の内なりとあそ門庶の富とて必と固ふ一衆と

威に及ぶとそわの時他邦よを使ふ事なるとの者ハ必智

急阿る一吾邦内士庶の強富なりとて之を怨むハ
一城門の葺葺なるハ我邦と次と終不改はれざるも
一又豊大閣院攻来一時三國兵を擡ハ二妙の論も
一標て敵の兵糧と絶するも三國兵を擡ハ二妙の論も
一切のゆるるるきと皆一回り勇なりと先君曰ふこと
一凡園も君とつハ民人乃君なりと先君曰ふこと
一地とハ如て馬の蹄よかけせ無事の子姓と傷もくハ

と産わるといふ又苞道よは俵よは秤ハ性温ふらと
 のふして能く是より場よは小收花よの多く是より裏より
 又その帯と製り糞と書く又草と造る即葉筆なり又紙
 よ造れと豪屋代と云蘇易簡紙譜云浙人以稻稈○本細
 稻稈煮治作紙其紙不可貼瘡能爛肉又云治墜馬撲傷損
 用糯稈燒灰以新熟酒連糟入鹽和淋取汁淋痛處立愈也
 ○凡稈の淋汁皆垢汗と洗ひ除く就中子稻稈の淋汁ハ
 布と出らし紅花に用お絹布と染を魚し沖繩の稲州先
 よし蓋て稲中
 夏とん獲とるらゆ米の實つりハよか又豪灰ハ鍛成
 らざれともわらふ力ありて灰汁ハ濃し
 ばよ用う金と鍛成らるるに灰と垢よもの也其旧鑑と

打おけ黄金と入く丸より十二までよ折より折毎よ必
 と入るよけ鑽とめて鑢の中と割る象眼はくふら如し

瑞稲書

西穂古事記序よ穂之西岐稲及麦よ二

嘉禾書周公受禾東土初作嘉禾之誥○春秋感精符曰下
 論於地則嘉禾興○孝經援神契德下至地則嘉禾生

○陳陰鑑嘉禾方嘉穀史記晉唐叔得嘉穀鄭玄云二
 合穎秀麥已分岐嘉穀苗同為一穂○說文禾嘉穀也

蕃名サ一メンブルウイ上ニハニテウ上一パイ上ニ

治部式曰中瑞曰嘉禾或異畝同穎或孽連數穂或一稈二

米也○天武紀七年秋九月忍海造能磨獻瑞稻五莖每莖

兩穗稻



天武元年八月

二十二

有枝八年八月縵造忍勝獻嘉禾異畝同穎同年十二月因

幡國貢瑞稻每莖有枝九年八月法官人貢嘉禾東觀漢記

濟陽縣是歲有嘉禾一莖九穗後魏書許謙字元遜代人

也子洛為雁門太守家田三生嘉禾皆異隴合穎○元史世

祖至元四年大原進嘉禾一本異畝同穎○持統紀六年九月伊勢國司獻嘉禾

二本○文武紀十一年九月京人大神大綱造百足家生嘉

稻○嵯峨紀弘仁五年八月大和國八島寺有嘉禾一莖十

八穗金五行志興定元年大社壇產嘉禾一莖十五穗○類聚國史文德天皇仁

壽元年八月河內國獻嘉禾一莖三穗○扶桑畧記陽成

天皇元慶九年正月甲斐國獲嘉禾是夕前天智紀三年

十二月淡海國言坂田郡小竹田史身之猪槽水中忽然

稻生身取而收日々致富粟太郡磐城村主殷之新婦牀席
頭端一宿之間稻生而穗其翌且垂穎而熟明日之夜更生
一穗殷得始富○大倭姬世紀曰 垂仁天皇廿七年秋九
月小島の嶋高嶺へくまきと止り大幡王命の舎人
紀磨と遣りしもの嶋所と看やとありふ小羅と看ハ
島國伊雜方の葦原の中は稲一基り存ハ一基小して
赤千穂茂るりの稲と白さき名鶴くまゆり村まらり
嶋に多し見取て嶋をらもち止り其反言申してまら
ふ倭姫命曰恐し事同ぬ多きと田作て皇太神子献り着
とと物忌娘あひく波稲と伊佐波登美神とて拔植小

して皇太神の御前小懸まらふ又と稲と大幡王女乙
姫と清酒造と名御あへり奉りまらふ稲生地と千田と号
島(江)今 唐書朔方節度郭子義言寧朔縣界荒地十五里有
志摩也 黒禾穀出遍地毎日附近百姓掃盡經宿還生前後可得五
六千石其禾圓實味甘美臣以為天啟興王先瑞百穀故漢
稱雨粟周頌來斝豈若瑞禾自出家給人足益陛下富教安
入勢農敦本光復社稷康濟黎元之應也又云元和中東川
觀察使潘孟陽上言龍州武安川中嘉禾生有麟食之復生
麟之來一鹿引之羣鹿隨焉光華不可正視畫工就圖之并
嘉禾一兩以獻是等和漢の登記も亦不蓋誣也

そのつらみ

むりーより荒蕪の極よむりて竹竿根樹皮を喰てい

るたわしつらみされども食小雨夜の星の光と稀ヒラも

稲粒イネふるもの糲シロされハ喉ノドも下りく菜食のつらみハ

必カナラ然シきさめ浮腫ウキハレて面部ウスグロイロ黧黑クワシ色イロあるものありて

氣力の憊ツレ手足の動ハタラクもまじりて

客叢書云乙卯春歉甚淮人至剥榆皮以塞飢腸○野語述

説曰延寶乙卯春適大歉飢殍滿道路予栖遲山市有賣樵

薪者其薪皮多白問之則曰飢者剥以當食也其方採松樹

剥皮煮之數沸然亦浸水去脂杆舂之入米少許為餅充其

飢腸也其餘無名之草木無不食之也雖固塞一時飢腸終

免其死十一二而已○南楚新聞云荆南孫儒之亂斗米四

十千持金寶換易纔得一合一撮謂之通腸米言飢人不可

食他物惟煎飲之可以稍通腸胃是人穀小非れハ生ナさ

の次在哉 百粒の色度酒ナリのさあ〜其皮膚の瘁カシぬ

るといふは常小雜穀と茹ヌて糯米と喰タぶるらゆ忽トり

や固て保蔵といつと一日小糯米七抄と糧シとるも

のそ終子クニニ餓ウ草ニを免ヒとといふ人糯米ニ非ズされハ亦モ生スる

也ナ 按キ小坂夷の人を春ハ十歳を以て身命ニとシて

して厨ノよりシ海寒の甚ニまりゆゑニとされハ和蘭の島ニ

と遊ブ稻ノもシ其ノ味ハ粟ノもシ劣ニてハ只ハ數ニ支ニ穀ノ肉ト茹ス

ふぬニまシ其ノ味ハ計ハ五十粒期命トもシ劣ニてハ只ハ數ニ支ニ穀ノ肉ト茹ス

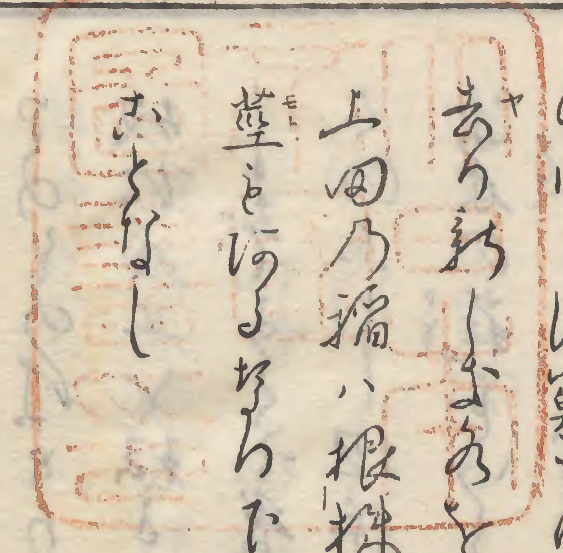
ハ人ノみて稲ノとシ食ハふルものハ豈ハ只ハ形ノ容ノのハいげ

のハ保ルとシ結ハとシてハ天ノ年ト全ク夫ハ稻ハ火水の知れと文て成

さるらううへも 皇國の種ハ漢ノ子ニ地ノ自然ノのみ穀ハ

て万國ノおひてハ流て着さるらふとあし志ハの体に編ハ

茎をさへりて太くするは實りまわろし是ハ
 肥のさへりて地の氣凝るるや其時ハ田と乾く枝よりて稻
 の間くに竅と明て地氣と脱るるを以て実と成り流
 あり新しき実とかくれハ穞也米かきり實りよし○
 上田乃穞ハ根株をせし凡穞の細根一畝にハ釋ワラ二十枚
 茎とありて下田は三本株れを三畝のまきよて殖ユヱ滋スス



成形圖說卷之十五終

此の書は... (Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

